

# 日本人社会学者でも symbolic interactionist ethnography を 手がけられるか

——社会的世界論を活用した社会現象の分析例

鎌 田 大 資\*

Can We Practice Symbolic Interactionist Ethnography as Japanese Sociologists?: Case Studies and Analyses with Social Worlds Perspective

Daisuke KAMADA

市民社会 (civil society) 概念を考案したといわれるアダム・ファーガスンは、人類社会の最初期から市民社会が存在したとするいわば市民社会常在論を提唱した (Ferguson [1767] 1980=1956)。現在、考古学的に理解されている人類史においては、アフリカの各種の大型の類人猿を含む豊富な動物相に恵まれたアフリカにわたしたちの祖先が発祥し、約 20 万年前に存在したミトコンドリア・イブといわれる女性のミトコンドリア DNA を、女系の卵子を通じた代々の継承によって現生人類の全員が受けつぎ、やがてアフリカを出て、世界中に伝播した現生人類が、4 万年ほどまえから日本を含む東アジア諸地域に定住し、独自の生活文化や文物を発達させてきたと考えるようだ (西秋 2020)。そもそも現生人類の遺伝上の始祖とされるミトコンドリア・イブの時代から、群居性の生活を営み、狩猟、採集、農耕、さらに石器にはじまる道具類や装身具、食器、家具、衣服、住居の製作などのミッションを遂行する多様な「社会」「集団」のなかに人類が生存してきたとすれば、そこにはさまざまな集団が結集しては、分離し、そして合流しては変質を繰り返かえし、異なった社会慣習を生成させつづける社会的世界の継起を想定すべきだろう。もちろん、それを市民社会といってもよいだろうが、ここでは、わたしたちの生活史の全貌は、アフリカから世界に伝播した人々のあいだに存在し、分派、合流、変質しつづける偏在、常在的な社会的世界の射程で語りうると考えたい。

わたしたち社会学者は、その歴史の一端を、自分たちが生活する現代に関しては、直接、間接の観察によって、作成した資料、データ、文書をもちいて記録、分析し、自分の見聞が及ばない過去の事象に関しては、歴史学、考古学とも共有される諸種の資料をもちいて整理、分析する。その際、シンボリック・インタラクショニストであれば、初期シカゴ学派の社会学者たち<sup>1</sup>以来、蓄積してきた、記述、分析の枠組みをもちいて、諸データに向かい、類比、対照関係が分析、検討される社会的事例から何らかの理論的、社会的、実践的 (また場合によっては美学的) 洞察に到達することを目指す<sup>2</sup>。

本論は、論者自身が SI の概念装置をもちいて、日本社会において取りくんだ研究事例をケースとして若干の考察を加え、当事者にとっては身の回りのミクロな社会現象にすぎない瑣末な

---

\*人間関係学科 准教授

事実の積みかさねを相互作用として分析することから、ミクロな社会現象がマクロな社会現象と相互浸透するミクロ - マクロ・リンクの発想も検討する。

## 1, 論者の研究史から——研究者個人の生活と相互浸透する日本での社会学研究史

副題のように考えると、本節で述べる研究経緯は、論者自身の受けた学部、大学院での教育訓練と論者自身の研究史の発展が相互浸透して、新たな社会調査の実践が生まれる過程と考えることもできる。あるいは研究訓練上の建前に近いSIの実証研究の勧めにより、論者自身の粗忽を通じて瓢箪から駒のように、新たな研究実践が生まれた過程かもしれない。

論者は京都大学で大学院に進学し逸脱の社会学を専門とする宝月誠氏に指導を受けた<sup>3</sup>。その際、実証的研究枠組みとしてのSIが常に話題になり、ごく当たり前のように自分もその枠組みによる社会調査をおこなうものと思い、取りくんできた。ただし気が付いてみると、現実にそれを研究枠組みとして調査に向かっている仲間はほとんどいない<sup>4</sup>。自分と同傾向の研究者が集まっているはずのシカゴ社会学研究会でも、あるゲスト的な参加者から、SIというのは実証研究に使えるものなのですかと、論者にとっては予想外の、ほとんど恐るべき質問を受けた。それほど日本の社会学界で、また論者のような、京都大学に着任直後の宝月氏の指導生出身でない社会学者にとって、SIと実証研究は縁遠いものという常識があることを思いしらされた。

考えてみると、宝月氏自身も婦人保護施設のインタビュー調査(宝月1982)などの実証研究に取りくむ際、特にSIの調査技法を前面に出しておられず、京都大学の同期の研究者たちも東北大学でジョージ・ミードを中心にSI理論の研究に取りくんでこられた方々も、目立った形でSIの理論枠組みを用いた実証調査を公にはしていない<sup>5</sup>。そうってしまったのは、もともと船津衛氏がSIについてシンボリック相互作用論という訳語を考案して紹介、普及する際に、大衆社会批判の文脈で、いわばフランクフルト学派の理論研究のアメリカ版のように論じられたことも原因の一つかと考えている(船津1976)。また日本の質的研究では、会話分析に偏った研究が組織だっておこなわれ、厳格派と文脈派の争いが紹介された結果、研究資料として取りあげる会話の断片の外部の、研究者にとって常識的な知識を解釈に持ちこんではならないという厳格派側の、ストイックなルールが普及している<sup>6</sup>。その際、ハワード・ベッカーの『アウトサイダーズ』の隠れた逸脱概念の批判(Becker [1963] 1973=[1978] 1993; Pollner 1987)のように、SIの社会調査で文化的に共有された常識的な観点を再検討して解体、再構成するいわゆる脱常識的な研究作法自体も疑問視し、禁じ手とするような、論者から見ると行きすぎた研究上の制約が課されている。そうしたことも、『アウトサイダーズ』以外に、アメリカで、多数、公刊されているSIの実証研究を軽視する風潮を生んでいるのかもしれない。

こうした風潮を尻目に、まったくそれとは無関係に論者はSIの実証研究を標榜して研究をつづけてきた。その成果はこれまで紀要論文を中心に人知れず公刊し、学界的にも知られていないので、ここにそれらを一連の系列として列挙し、日本でも本人の意欲しだいでSIの実証研究は可能だということを示したい。そのうち、一つのプロジェクトは実質的に終結を目指しており、今後、取りくむことになるものも合わせて、わたし自身の研究から三つのSIの実証研究の事例を紹介する。

## 2, ストラウスの社会的世界論と交渉研究

本論では、アンセルム・ストラウスの社会的世界論と交渉文脈概念をほかのSIや初期シカゴ学派に由来する諸概念と合わせてもちいている。論者は修士論文でベッカーの「芸術世界論」(Becker [1982] 2008=2016)と、それを敷衍し一般化する議論として、ジョン・デューイ、タモツ・シブタニ (Dewey [1926] 1929:166-207=2017:178-217; Shibutani 1955, 1962)らに由来する社会的世界論 (Strauss 1978 など)との関連について論じて以来、ストラウスに注目してきた。したがって、今回、紹介するのは、研究者としての初心を忘れず愚直に実践しつづけてきた過程である。

ストラウスの交渉、社会的世界概念については、次節のケース1で紹介する論文で以下のよう  
にまとめている<sup>7</sup>。

A. ストラウスによれば、1, 社会秩序は「交渉される秩序 (negotiated order)」である。2, 特定の交渉は特定の構造的条件とコンティンジェントである。3, 交渉の産物すべてには時間的限界がある。というのは、それらは見直され、再評価され、改訂され、廃止され、更新されるから。4, 交渉される秩序は従事されねばならず、合致行為の基礎は絶えず再建されねばならない。5, どんなある時点での交渉される秩序も組織の規則と政策の総計として捉えられうる。6, 交渉される秩序に加えられるどんな変化も再交渉、再査定を要請する。7, 社会、組織の秩序の再建は日々の交渉過程と定期的な査定過程の複合的関係として促えられる (Strauss. 1978a:5-6)。

「交渉」概念は、具体的相互作用としての交渉とその背景としてのより大きな社会秩序のあいだの相互影響を捉えようとするものである。ストラウスは交渉に影響を及ぼす「文脈」として、個々の交渉の文脈である交渉文脈と、構造的な文脈の二つのレベルを区別した。文脈とは「焦点を合わせられる他の単位 [相互作用]<sup>8</sup>より大きな包括的秩序の構造的単位」である (Strauss 1978a:99)。彼の理論の功績は、構造的な文脈と個々の交渉のあいだに中間的な交渉文脈を構想して範型化したことにある。それは個々の交渉のなかから創発してくる条件でもあり、これがまた交渉に対し影響し、そして個々の交渉で定められた秩序が構造的な文脈として再び定着していく。

「交渉の各局面の時期区分についてはフィリップ・セルズニック (Selznick 1957=[1963] 1985) のリーダーシップ論を援用しており、そこでは組織内部の「公益」の再定義が権力闘争を経た組織の再編に伴うとされている。」<sup>9</sup>ここでは、「公益とは何か」の「定義」を組織の活動についての「正統性 (legitimacy)」と読み替え、ストラウスの「社会的世界 (social worlds. Strauss 1978, 1982, 1984) の枠組みに接合する。

「社会的世界」は、「制度体」同様、メンバーや範囲が固定、確定した組織よりも緩やかな社会的集合体を論ずる枠組みである。それは交渉される秩序として存在する。生成流動しつづける現実のなかで、それらが分節化 (segmentation)、交差 (intersection)、正統化 (legitimation) する過程を、彼はモデル化した (分節化、交差という系列と、正統化という系列は並列的に補い合う)。社会的世界の正統化、分節化過程で、ストラウスは実行者たちの活動に言語的な説明を与える活動を理論化 (theorizing)、それを行う者を理論家 (theoretician) と呼んだ。(鎌田 1991:34-36)

交渉は多様な場面で生じる相互作用の一部を定型的に分類し、時間の流れのなかでのその参加者、性質の変化を比較検討するうえでの有効なツールとなろう。また、社会的世界の考え方は、テクノロジー、技術、活動の対象、その形態、イデオロギー、参加者の特性、リクルートの形態など、多様な分岐点ごとに社会集団が分派、合流、変質していく過程を記述し、事実に基づいて分析する有力なツールとなろう。こうした概念が明治維新以降の、漠然と近代と呼びならわされる時期区分に限定されず、可能な限り有史以来の歴史を辿り、さかのぼって、社会的な思考を展開する「歴史研究」の装備となることを期待している。

### 3、ケース・スタディ——三つの研究事例

#### ケース1 京都古都税論争の交渉、交渉文脈の研究

論者の最初の実証研究（鎌田 1991）は、京都の文化観光振興税、のちに古都税と呼ばれる観光寺院が徴収する建物や文化財についての拝観料への課税を強行する京都市の行政と、それは拝観事業を通じて仏教教理の普及啓発に取りくむ寺社の信教の自由を侵すと主張する抵抗運動の抗争を、相互作用として捉えるものだった。

基本的に観光名所として拝観料収入がある寺だけに関係する事案にもかかわらず、当初は京都仏教会として、観光資源をもたず利害関係のない寺まで含めた裁判闘争が生じ、条例が施行されたのちには、無料拝観により税徴収への抗議活動をおこなった寺院もあったものの、有力観光寺院の中核メンバーは税が存続する限り拝観停止して、最後まで税徴収に抵抗した。そうして観光都市京都の多くの関連業種の人々も巻きこみ、寺と行政の面子をかけた闘争がつづき、最終的には京都市が折れて条例を廃止するという顛末であった。そのなかで、一方の当事者は京都市である点是不変だが、寺側の当事者は、裁判闘争をおこなう京都仏教会から有力社寺の有志メンバーへと変わり、また途中、事件屋と称され、土地買収、地上げの際に交渉のあいだに入って話をまとめる人物のかかわりが取り沙汰されるなど、新聞や週刊誌の紙面をにぎわす多様な展開が観察された<sup>10</sup>。

当初、学部生であった論者たちの調査では、調査実習の指導者、田中滋氏とともに、寺側の複数の当事者、行政、マスコミ、観光関連業者に聞き取りをし、インタビューのたびごとに研究会としてその内容をレジュメにまとめて認識を共有した。さらに調査票を配布しての市民意識調査も実施したうえで、それぞれのメンバーが卒業論文のテーマとして考察し、何人かが大学院に進学したあと、科研の報告書をまとめて終結した。その際、すでにベッカーの芸術世界論（Becker [1982] 2008=2016）とストラウスの社会的世界論（Strauss 1978 など）について調べて修士論文（鎌田 1989）を執筆していた論者は、ストラウスのもう一つの重要概念として交渉文脈（Strauss 1978a）に注目し、古都税紛争において観察してきた交渉の各局面について、その文脈や交渉当事者の変遷、交渉の俎上へのぼる双方の掛け金に相当するものなどの諸要素について考察した（表1）。考えてみると、交渉や交渉文脈といった概念はSIにおいてよく言及されるが、歴史的、社会的に著名な事件の具体的な交渉の内実について、その枠組みに沿った分析を行った文献は、日本では比較的まれである。論者が無知なだけなのか、ストラウスのこの著作を読む人自体が少ないのか、単に枠組みに当てはめるだけの考察に終わる懸念があるためか、すぐにも多様な場面で活用できそうな枠組みにもかかわらず、実用されにくいのかかもしれない<sup>11</sup>。

表1 古都税紛争における交渉の諸相 (鎌田 1991:47)

表1、 第一次、第二次文観税、古都税の施行をめぐる京都市と対象寺院の間の交渉文脈 (\*は重要な項目)

	第一次、二次文観税	古都税 (第三次文観税) 1982年8月以降 (臨界的決定1)	古都税 1985年4月以降 (臨界的決定2)
交渉者の数	市長、(一) vs 寺(多) スタッフ	*市長、(一) vs 仏教会(一) スタッフ	市長(一) vs 西山氏(一)
相対的経験 誰の代表か	市長 > 寺 行政 > 寺自身	市長 < 仏教会 行政 < 寺	*市長 < 西山氏 行政 < 仏教会の対象寺院
交渉は一回限りか、系列的か	系列的	系列的	系列的
権力のバランス	市長 ≥ 寺	市長 ≥ 寺	*市長 = 西山氏
賭けられた利害	体面	体面	体面
取引の可視性	露出的 + 隠蔽的	隠蔽的 → 露出的 (→ 間接的)	隠蔽的 → 露出的 (→ 間接的)
交渉される件の数、複雑性	1、単純	2、単純	1、単純
合法的正統性の限界	あいまい	あいまい	あいまい
交渉を避ける選択肢	寺・認可前 拒否権 寺・認可後 拝観スト 市 (条例廃案)	寺 拒否権  市 (条例見送り)	寺 拝観停止  市 *条例廃案

とはいえ、一般に政治史において、一国の政治、外交の大枠を定めた多様な場面で、ほとんど密室でのやり取りでことが決してしまうということは、吉田茂がサンフランシスコ講和条約を締結して日米安保条約を受け容れ、ついで日米行政協定を結ばせ、岸信介が新安保条約を受け容れて地位協定に署名するといった例のように数多いと思われ、ほかにもロシアからラックスマンやレザノフが通商を求めて来航した際の松平定信や、有名な遠山景元（いわゆる遠山の金さん）の父で長崎奉行となった景普の応接のような、まさに外交使節を迎えての交渉の事例でも、担当者が交代しながらそれぞれ別個の権限と掛け金をもつての交渉の反復が観察される。こうした決定の背後にあるものを定型化し、一覧表にして提示するうえで、交渉パースペクティブの有効性は高いだろう。歴史的事象を検討する際に、マルクスが言ったような下部構造決定論に依拠する視点は、マルクス主義の陣営でもアルチュセールの重層的決定論などによって更新されたのかもしれない (Althusser [1965] 2005=1994)。交渉文脈には構造的な側面が考慮されるが、それも実際に交渉に当たる当事者に与えられた権限や、掛け金は何かという個人単位のオルタナティブに媒介され、さらに当事者の交渉という状況への習熟度にも左右されるのは明らかであり、当事者自身の視野のなかで限定された役割を与えられる。そうしたことは通常の外交史の捉え方のなかでも十分に考慮されるべきだろうが、社会学者もまた交渉パースペクティブに依拠することで、議論に参加できるようになる<sup>12</sup>。

## ケース2 平成の30年間にわたる精神保健福祉制度と、ある患者会の変遷

つづいて20世紀の終わりから21世紀の初頭に取り組み、平成の30年間における制度の変遷も考察する形で、終結に向けた一節を書きくわえた精神保健福祉サービスの現場に関するエ

スノグラフィを振り返る。そして自主的に振り返りの機会を設定した本論では、調査に入った初期の着想とも比べ、2回おこなった大きなまとめで判明したことも再考する。

論者は、住居地の近くで開催されていた寛解期の統合失調症の患者さんの患者会に、オブザーバーとして参加して、主に雑談の輪に加わりながら書きためたフィールドノーツを再解釈して研究した。研究の当初は、デンジンの解釈的相互作用論に学び、精神科ソーシャルワーカーが執筆した患者の個人誌を再解釈し、またデンジンのアルコホリック研究で援用されていたサルトルやベイトソン理論の再解釈に取りくんだ（鎌田 1994, 1995, 1997, 1998）。実際には、エスノグラフィを執筆するごとに、フィールドでの観察および記録の成果をまとめ直すことになり、その度、新たなまとめ方と物語が見いだされ数編の論文を作成した（鎌田 1999, 2000, 2001）。過去に2回、大きく全体を回顧したのは、観察自体を中断する際（鎌田 2002）と、20年近くを経てその過程全体を見なおし概括的に考察を加えた際（鎌田 2020）である。

先の古都税問題における交渉文脈の変遷をめぐるエスノグラフィと同様、この精神保健福祉のエスノグラフィでも、大まかな調査目標は最初から持っているものの、その目論見も先入見として調査に持ちこんだ偏見に近い諸概念も、すべてはブルーマーのいう感受概念としての機能を果たした（Blumer [1969] 1986=1991）。すなわち調査過程の個々の局面で、調査者の行動を導いた指針や方針のリストは、実際の社会過程の進展のなかでまったく放棄され、蟹気楼のようにはかなく書きかえられた。結局は、波打ち際に築かれた砂上の楼閣が現実の波にさらわれ粉々に砕かれ、その破片に残る海の状況の痕跡を手がかりにして、ほとんど何の手がかりもなくばらばらにされたジグソー・パズルの断片を組み合わせ、無理やり一つの絵柄に見立てていくように、エスノグラフィは再構成され、書かれていく。

論者がかつて寺岡伸悟氏と翻訳した『感情とフィールドワーク』（Kleinman & Copp 1993=2006）という小さな手引き書では、調査終了後、またはその途中に自分の経験を言語化しようとする際、胃が痛くなり身体的な苦痛を感じるような点を重要な手がかりとして、そこから目をそらさずに全体の過程を見なおすことで、物語や状況の見取り図を新たな視点から描きなおすことができるといった形で、身体感覚や感情をもつ調査者の全身で調査データに取りくむ態度が描きだされていた。どういうわけか、わたしの身の回りや家族の生活は、省みていやな気分になりショックを受ける事態で溢れていた。その家族の問題を振り返る際と同じような気分です。親しく友人として交際した精神障害者患者会の皆さんとのかかわりを、毎回の対話のあとで記憶に基づき、自室に戻り時間をかけてフィールドノーツを書きとめ、それを見なおし分析的に項目化して編集したものをデータとして眺めながら、毎回のエスノグラフィの執筆に取りかかる<sup>13</sup>。ただしそこでやっている文書の編集や操作は、同時に並行して取りくんでいた社会学説史の研究で原典や2次文献を読みこんで抜粋し、独自の項目を立てて整理していく作業とまったく同じである。ただフィールドノーツ自体が自分自身の書き物であるということだけが違っていた。

以下、なぜ精神保健福祉を対象に選んだかという点を糸口にこの研究を再考する（鎌田 2020：144-145）。論者の人生においてこの話題と出会ったきっかけは、前のケースの途中でも述べたように、ベッカーの芸術世界論を映像関係の社会的世界に応用して、フィールドワークするため休学していた時期にある。そして、やはりこれも瓢箪から駒的に調査対象に出会う一例である。その際、映画、いわゆる「ホンペン（本編）」の美術助手の見習いからはじめて、単発30分枠深夜テレビドラマの制作部、そして演出部<sup>14</sup>、さらに週一レギュラーで日曜朝に放送されていたトーク番組の制作演出部<sup>15</sup>から、半端な見習いでしかない論者を拾っていた

だいた製作会社ごと、少し大き目のケーブルテレビ局制作の報道番組のフロアおよび取材 AD へと移動するなど、こまごました仕事の現場を論者はうろついていた。その報道番組の仕事で、主に自民党の議員連盟、すなわち当時、族議員といわれていた人たちの議会外活動を取材するという企画を、当時の毎日新聞の論説部顧問の政治記者で、論者の担当番組のキャスターだった岩見隆夫氏（故人）が発案した。国会議員会館内の自民党事務局でもらってきた議員連盟のリストを手がかりに、それに関連するさまざまな事業や活動を取材した。その際、ボーリング、配置薬（富山の置き薬）などにまじって、高齢者の福祉入浴サービスや、精神障害者のソーシャルクラブ活動などがあり、一番、あいまいで正体が分からず活動の伸び代がありそうな領域として、精神医療および福祉に関係することを調べたいという意欲をもった<sup>16</sup>。さらに番組が終了して失業していた時期に、患者さんへの接し方を病院スタッフからアドバイスする家庭教育用のビデオの製作をボランティアで手伝った。その際、悪質な精神病院に入院してしまった患者を退院させたり、もっと良い治療をする病院に移したりするための法的支援に取りくんでいる方ともその病院で知りあった。そこで患者自身の人権擁護という視点から処遇の向上を図るという活動も知り、患者自身の社会運動が盛りあがれば、水俣病をはじめとする公害病に公的支援が得られ、企業が謝罪して公害を発生させる事業の仕組みが是正されるのと同じように、精神科の患者の尊厳も守られ、社会の全般的な人権意識もさらに高まるのではないかと考えた<sup>17</sup>。そこで患者さんたちの生活の実態を知ろうと、大学院に復学してからは住所地の保健所のデイケアでやっていたグループワークと、地域でやっていた病院外の患者会に参加し、大学に就職してからも同様に、保健所の精神保健福祉相談員が世話人となって開始された病院外の患者会に、フィールドワークとして参加するようになった。調査法の教科書的に言えば、フィールドを見つけてそこに参加すること自体も技法のテーマになるが、それには身近な人脈を手繰って情報を得るため、頭を下げてあいさつ回りをする過程があったという程度で省略する。

フィールドワークを中断しつつあるころに書きあげたまとめでも、そうした人権擁護的なアプローチから、患者自身が声を上げて社会運動をおこなっていくという過程を見いだすことは、放棄せざるを得なかった。たとえば精神科の患者のセルフヘルプグループに関しては、会自体は言いつばなし聞きつばなしのストレス解消の場とするにとどめ、病状悪化の可能性を避けるため、なるべく社会運動や社会的主張をすることは避けようという考え方があり、権利擁護の社会運動に患者自身が携わることは回避するようになっていた。さらに発病の経緯を聞くことすら、病状悪化の引き金になる可能性があるため控えるようにと嚴重に注意された（鎌田 1998a）。それにそもそも、精神科通院歴のある犯罪者の凶悪犯罪が起こるたびに、マスコミの報道がその点を強調するので、すべての精神障がい者が凶悪だという偏見が、依然として社会に広まっている。こうした偏見の壁を、アイザックとドロシーのトマス夫妻による状況の定義という古典的概念（Thomas & Thomas 1928:572）をもちいて述べ、そこで規定される偏見の壁を背景として、論者が観察した患者会（以下、Z 会と呼ぶ）の活動の変質を検討した。

その会は、当初、ある保健所の精神保健福祉相談員が、精神医療、保健の分野で良心的と自負する人のあいだではぐくまれた社会復帰アプローチの考え方に導かれて、会の開催を呼びかけ集まった人たちの集いの場であった。ところが、そこを最初から手伝い、精神科患者の小規模作業所で主に手芸を指導するある主婦ボランティアが、リーダーシップのある患者を中心に支援するために、手芸の自主製品づくりに取りくむ作業所的な活動をメインに患者会を変質させ、自分の資金で場所も借りかえて再出発した。最初に患者会の活動を立ちあげた相談員氏はこうした変化の提案をそのまま受け容れ、自分をはじめた活動が民間の別の活動へと変化し、

成熟したと位置づけて、身を引いていった。ただし、こうした患者会の変化自体は、今の視点から見ると、時代の趨勢に従う変化ではあった。精神保健福祉関連の小規模作業所事業が家族会主体で各地に立ちあげられていき、福祉サービスを担う社会資源として増殖したインフラ整備のあと、国や県からの税金を投入した補助金による支援も受け、そのことで行政側も国や地方自治体の下部機関として作業所へのコントロールを確保した。多様な経緯で各地に成立した小規模作業所を中心とする社会資源は、バブル崩壊以後、継続するゼロ年代以降の低成長時代に、基本的労働政策の一部とされはじめた就労支援の一翼を担うものとして、また高齢者、障害者など多様な分野を一律化した共通のサービス提供の標語となっていった生活支援の考え方とともに、事業性の高いA型、従来の居場所提供的な内職や憩いの場としてのB型という風に分類される就労支援センターに組みかえられていく。Z会の変貌は、主婦ボランティア氏の個人的資金を投入して時代の流れを先取りする形となり、患者会世話人の相談員氏も、その変化を受け容れたのだろう。

もちろん、そうした展望は部外者で行政のインサイダーとしての情報に接していない論者には見えていなかったところだが、平成30年のあいだを通じて、精神保健福祉の社会資源が増加し、それに反比例してもともと結核予防などの意味で全国展開した保健所の業務が縮小し、民営化されていった流れが読みとれるようになった。実はこうした変化は社会運動によらず、国家レベルでの政策の見直し、リストラの結果、精神障害者の社会復帰という言葉で語られていた中心的領域である地域での自活とそのため職業訓練、就労を目指すことを表だつての目標として掲げた小規模作業所や職親という制度を、近隣領域として今でいうハローワーク、かつての職業安定所でやっている一般的な失業対策の事業と一体化して効率化しようとするものだろう。近年のコロナ禍において、過去の社会資源の蓄積など原理的にあり得ない新奇な事象に対して、縮小された保健所のマンパワーで、必要とされる膨大な仕事量をカバーすることが求められたことも、こうしたリストラに付随する現象である。保健所に関する行政施策としては、この件を教訓に規模を縮小したままでも機動的に人員を動員し、必要に応じて訓練できるような仕組みを構想するか、それとも旧来の保健所の機能を極力維持していくかのどちらかが求められるだろう。精神保健、障がい者福祉の分野においても、就労という点を表に出せば、実質的に就労がむずかしい人たちががっかりさせてしまう。しかし国単位でおこなわれる効率化の名目のまえに、以前から多様に実施されてきた事業自体が変質し、一律にならされていく事例がそこにあるように思う。結局、やはりこの領域では社会運動のパスpekティブは成りたらず、国単位の福祉事業のリストラが生じただけであった。

人権擁護の面では、従来から言われてきた社会的啓発の面でのブレイクスルー、意識改革を待つばかりなのだろうか。たとえば（ひょっとして）、大衆的に親しみやすい小説、ドラマ、演劇などでこうした問題に通暁した作者が社会的な問題提起をすることも可能かもしれない。こころの病をもつ患者の暮らしを穏やかに静かに見つめて、健常者にも生きる指針を与えるような。何しろ国民の何割かは、さまざまな事情から生涯のうち、ある程度の時期、心の平衡を崩して不調に陥ることぐらいはあるものだから。

社会運動の視点からの研究は挫折しても、社会的世界論の視点に戻ると、実際には論者の研究がカバーする平成30年間のこの分野の動向を見ても、障害者の小規模作業所運動、精神障害者の人権擁護を支援する法律家たちのアプローチ、良心的な精神医療関係者のあいだで育まれた「精神障害者の社会復帰」のアプローチ、安倍政権下に進展したばら撒き行政の一環ともされる全国的な就労支援の施策の展開につれて、「社会復帰」の標語が「就労支援」に変更さ



れての就労支援事業所 A, B 型の整備と、それと並行して高齢化にともなう要介護者向けサービスを敷衍しての生活支援アプローチへの移行など、多様な運動、施策がない交ぜに展開して現状に至る全国的な再編が観察できる<sup>18</sup>。

### ケース3 大須歌舞伎、オペラを創造した前衛美術家、岩田信市氏の活動に関する解釈的相互作用論

最後に、これから論者が取りくんでいきたいのは、名古屋を基盤に活動していた美術家、岩田信市氏に関する伝記的な研究である。岩田は1935年に生まれ2017年に逝去した。報告者は20世紀末から21世紀初頭にかけて、先の精神科の患者会の調査と一部重複して、岩田が主宰する劇団、スーパー一座の活動に参加した。年末におこなっている歌舞伎公演のあとの研修会から夏のオペラにもかかわり、自ら志願して未訳の台本の原典や音源に関する調査、翻訳を引き受け、主にオッフェンバックやギルバート&サリヴァンの笑えるオペラ、英語で comic opera, フランス語で opéra comique と呼ばれるジャンルのものばかり、10年弱の期間、毎年、1, 2作を訳しつづけた。その翻訳自体は岩田が編集して実際に歌う歌詞を作成し、編曲された楽曲のあいだをつなぐ芝居の元になればいいので、厳密である必要はなく、岩田自身からも「気取るな」と指示され、なるべく親しみやすく、歌舞伎公演で慣れた鶴屋南北や河竹黙阿弥の世話物のセリフのように、庶民や侍が砕けた調子で交流する会話に近づくべく、時代劇的なテイストを入れて作成した。岩田の逝去後には、その事跡を追悼するために、オッフェンバックの『青ひげ』と『ブン大将』の、メイヤックとアレヴィを著者とするフランス語の原戯曲を見ながら、過去の訳稿を手なおし改めて「翻訳」として原稿化した (Meilhac & Halévy n.d. [1900-1902]=2018-2019, n.d. [1900-1902]a=2021)。さらに岩田がオペラ演目の選定をおこなった背景に当たる情報として、現在、判明している限りでの個々の演目の日本における過去の上演歴も調べた (鎌田 2020a)。そして今後、自分の訳文と岩田自身の上演台本を照らしあわせれば、岩田の作劇や演出を考察する材料が得られる。

スーパー一座の活動は岩田が40歳ごろから、座長の原智彦氏と二人三脚で続けてきたものである。それ以前の美術家としての活動には、高校時代の油彩や日本画、卒業後の京都での日本画の古画修復の修行、東京でアヴァンギャルド芸術の活動に励む高校の同窓生、赤瀬川原平氏らハイレッドセンターの活動を横目に見ながら、名古屋での盟友、加藤好弘氏と組んでのゼロ次元という団体が前衛アートパフォーマンスを連発し、加藤が東京に移転してからは、原のゴミ裁判の支援にはじまったゴミ姦団の活動から、日本全国のヒッピーを糾合しての名古屋市長選への出馬などが含まれる。

さらに居住地、大須で開かれはじめた大道町人祭りで、山車に乗せたセットの前で原氏が歌舞伎風に扮装したパフォーマンスから展開して、スーパー一座を旗揚げしての歌舞伎公演、そのヨーロッパ・ツアー、海外公演に招聘してくれていたプロモーターが亡くなってからは、国内で、特に大須演芸場を拠点とした劇団活動を継続し、ロック歌舞伎として、市川猿之助のスーパー歌舞伎に先駆けて、現代風のロックに乗せた歌舞伎上演を定着させた。そして海外公演で手がけていた歌舞伎風のシェークスピアの公演の経験もあって、歌舞伎を日本の音楽劇とすれば、そのヨーロッパ版のオペラもできるのではないかと気づく。そして演目選定の際には、大正時代に社会現象ともなった浅草オペラを再現し、乗りこえていく大須オペラという上演活動も80年代から開始した。こうした一連の活動は、岩田のなかでは自然な展開として考えられていたものの、美術批評においては現代美術としての身体パフォーマンスの時代しか語られな

い傾向がある（黒ダ 2010）。後半生の歌舞伎、オペラ、シェークスピアの上演活動も、自身の美術家としての活動の展開として捉えてもらいたいと、劇団活動終了後、岩田は自身で企画してその活動を回顧的に評価する書籍を構想していた。論者はそうした岩田の活動、発言を間近に見聞きし、そういうつもりはないものの、実質的に劇団の活動にも参加する参与観察者と同

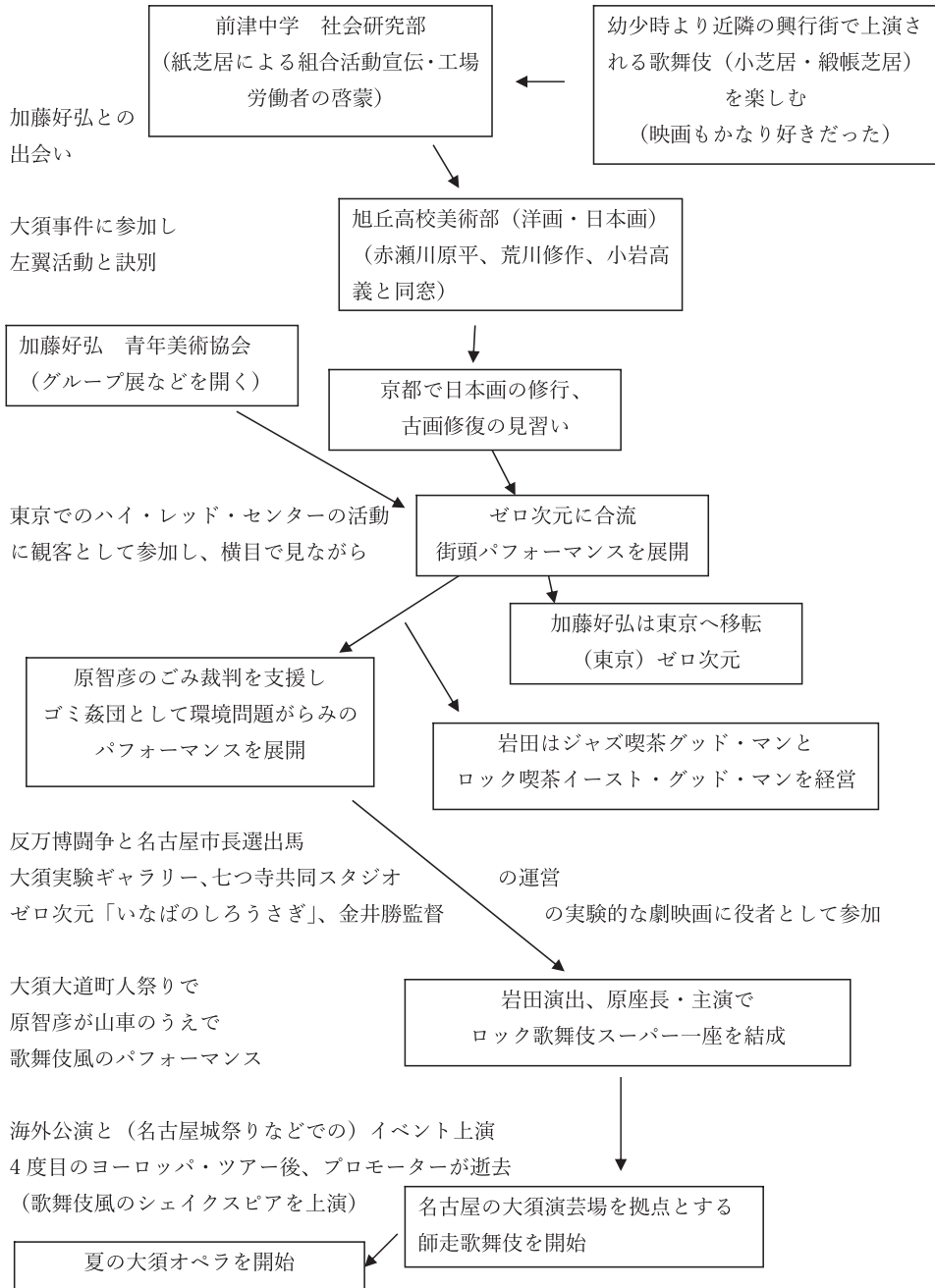


図1 美術家、岩田信市の芸術活動の軌跡と関連する社会的世界の変遷（『Rear』（2018:126-145）年譜参照）

様の立場にいたため、ここでも特に岩田の活動に焦点を絞って、伝記的な研究をしてみたいと志している（図1）。

その際には、前項でも触れたデンジンの解釈的伝記研究、日本ではむしろ訳書のタイトルとなった『エピファニーの社会学』（Denzin 1989=1992）と言ったほうが分かりやすいかもしれない視点から考察し、岩田の芸術活動におけるいくつかのエピファニーを抽出して論じる予定である。

この伝記的研究においては、岩田自身が前衛美術、演劇における新たなムーブメントの創始者となって、多様な活動を分岐させる結節点としても機能したことが観察できる。すなわち個人の生活史、生活誌自体が多様な社会的世界の生成、発展、分岐、合流に関与している。

以上、三つのエスノグラフィ的研究に言及してきたが、最初の一つは学部生から大学院生時代の見習い社会学者としてのものであり、最後のものはこれから取りくむ研究の予告編に過ぎない。実質、長期間にわたり取りくんできたのは、二つ目の精神科の患者会に関するフィールドワークのみである。ともあれSIのエスノグラフィが日本で可能なのかが疑問視される状況を改善すべく、いくらかの水増しをしたうえで研究例としてデモンストレーションをした。

#### 4、考察——マイクロ・マクロ・リンクあるいはフラクタル仮説

最後に、上記のケース・スタディから、その研究枠組みとなったSIの一側面について考察する。すなわち、社会現象を長期の時間の流れのなかで過程として観察する際、特に人々が集団をなして社会的世界を構成し、それが複雑に枝わかれし、絡みあいながら状況を変動させていくマクロな現象を観察、分析、検討しうる能力もSIが備えているということ、そして、フィールドワークにより獲得する小集団の相互作用のデータが、歴史的的事象と呼びうるマクロな社会現象とかかわりあう様相、いわゆるマイクロ・マクロ・リンクと呼ばれる問題も合わせて考察する。

その考察に向かう前段階として、SIが個人あるいは集団間の相互作用を扱い、個人間の相互作用を考察する際と、集団同士または集団と個人のあいだの相互作用を扱う場合では、若干、考察すべきポイントが異なることを指摘できる。個人としての人間には内面があり、状況認識した外界の事柄を咀嚼して、かなりの自由度を持って実際の行為、行動に反映させることになる。SIの哲学的創始者と見なされるミードの自己論によれば、そこで個人の自己の2局面としてIとmeが観察、考慮される（Mead [1934] 2015=2018）<sup>19</sup>。集団は個人から構成され、内面を持つのは集団メンバーである個人だから、集団の行為、行動を導く集団自体の内面を想定するのではなく、やはり集団の行為、行動にかかわる諸個人の内面を想定すべきであり、それが多様な現れ方をして集団の行為、行動が導かれる。ただし、こうした留保を考慮したうえで、やはり集団自体が他の集団や諸個人、あるいは自分たちの集団内部に向けて、何らかの意思表示、行為、行動をすることはあると考えてもよい。そうした意味で、集団にかかわる相互行為が存在した場合、たとえば単純に、国家という集団を代表する外交官が、他国を代表する外交官と、国同士の関係を定める協定を結ぶというような場合、それを分析、検討するマクロなSIという視点を採用してもよい。

ここで、ある見方によれば、前節のケース1と3は同様の問題を提示していると考えられる

が、ケース2はまた別個に考える必要がある。

個人同士のミクロな相互作用と、集団にかかわるマクロな相互作用の関係はどうかといえば、先のケース1の京都仏教会と古都税徴収に反対して拝観停止をつづけた中核観光寺院や、ケース3の種々の芸術活動を組織、実行した岩田、加藤、原らは、第2次世界大戦後、急速に発展した各種のメディアに話題を提供し、メディアの影響力を計算、駆使して、報道により多数の読者、観客、聴衆に自分たちの行為、行動が伝わっていくことを前提として活動したことは確実である。その際、ケース1においては集合的主体としての市行政と京都仏教会、そして中核観光寺院の交渉により重要な決定がなされた。というより、あらゆる交渉が成立せず、物わかれに終わり互いに譲歩しないことで、最終的に京都の有力社寺が観光事業への協力を拒む状況を作りだし、市行政側からの譲歩を勝ちとった。ケース3において岩田たちは、前衛美術パフォーマンスとしては各種の映画、写真週刊誌などに話題提供することで、風俗的な知名度を獲得し、また大須歌舞伎、オペラにおいては地元の冬、夏の風物詩としてテレビや新聞の報道の対象となることで、全国区ではないものの少なくとも中京圏一帯での知名度を得た。これもまたメディアとの交渉、すなわち自分たちの活動を告知し、その報道を許容することで、近視眼的には大須の芝居興行の宣伝をおこない、また少し大きく見れば地域文化の担い手としての存在感を獲得できた。ケース1,3ともに、こうした行動は、ミクロな相互作用がメディアの拡大鏡を通じて、マクロな社会現象として認知され、地域住民の行動に影響を及ぼした事例であろう。

他方でケース2において、論者の観察した患者会の活動が居場所提供や生活の困難の分かち合いの場から、就労に近づく自主製品づくりの作業所と娯楽のための集まりとして再組織されたことが、生活支援と就労支援を両輪とする他分野の社会資源との一体化的な運用に、リストラされる過程の先取りのように思えることは、一見、マクロな社会福祉実践の体制変動が、ミクロな患者会の編成替えに先取りされて観察されることのように思われる。しかし、それは意図をもった社会運動やメディアへの働きかけが、治療上の配慮から困難な精神医療、保健の分野において、情報発信や交渉の結果として、ミクロな活動がマクロな社会現象に影響を与えた事例とは、到底、考えられない。むしろすでに論じたように、メディアを通じて流布、強化されつづける精神障がい者を犯罪者予備軍とする偏見、状況の定義を共有する社会において、ミクロな相互作用をおこなう患者会関係者と、全国単位での資源や税の分配を担う官僚たちが同種の社会的圧力を受けた結果、同種の行動をとったとでも考えるより、説明のしようがなく、簡単な因果関係の連鎖が想定できない事例である。この場合、ミクロ・マクロ・リンクに思いをめぐらし、鳥瞰的に観察されるマクロな社会現象と、個人同士の相互作用から観察されるミクロな社会現象が同じ形をとるといったことは、巨大な図形を顕微鏡で見た場合、その細部も大きな見取り図と同じ形をしているといったフラクタル図形のイメージで考えられ、社会現象におけるフラクタル仮説といったものの例示と考えることになる。エスノグラフィによって社会を記述するという場合、ある小集団が異常、特殊なものであると考えるのではなく、何か普遍的な大きな社会の一部をなすものと考えれば、小集団の研究から大きな社会現象の予測が可能になる。統計的な無作為抽出やサンプリングはまさしくこの考え方に基づいている。しかし、エスノグラフィは、そうした大きな集団の観察を代表、代行するわけではない。逆に、特殊な集団の特徴を浮き彫りにすることで、大きな集団の諸特性と対比できる例外的な諸特性の抽出を目標とする。ケース2の場合は、そうした考えから特殊な集団としての患者会の研究をしていたところ、日本の全国レベルの福祉行政の体制変動の縮図のようなものを観察してしま

い、やはりここでも初期の目標からはかけ離れた予期せざる結果を獲得しておわったことになる。そこからある種のフラクタル仮設の気づきが得られるかもしれないが、とりあえずは未だ両極端の事例に見いだされた偶然の符合のようなもの、あるいは気のせいでそう見えるだけかもしれないものと、控え目に考えておくのが良心的な研究態度だろう。

## まとめ

多くの内外の先行研究者や調査協力者に学恩をこうむり、論者は自分なりの SI のエスノグラフィに取りこんできた。国内に先行例がなくても、英文の調査報告書を手本にすればよいはずだと、国内の社会学界に十分に紹介されていない枠組みを参照し分析的エスノグラフィを目ざして、性急に報告書を作成してきた。ただし、こうして、いきなりはじめるのでなければ、生涯、分析的エスノグラフィに辿りつけないのではないかという思いもあった。ただ本論全文を要約して言うべきことは一つだけである。すなわち、表題のごとく、日本人でも SI エスノグラフィを執筆することは可能だということ。とはいえ、この主張もすでに何人かの研究者の努力で実証されつつあり、言わずもがなの蛇足を虚空に投げあげたことに似ている。

## 注

- 1 シカゴ・モノグラフ全般について社会的世界論の現代的意義に注目しながら紹介、検討した規範的な文献としては、宝月（2021）を参照。
- 2 symbolic interactionism を、以下、SI と略し、それに依拠する論者(symbolic interactionist)は SI 論者と略す。
- 3 本論では論者の大学院時代の直接の指導教員の宝月先生のような目上の諸先生方を含め、言及を加える日本の研究者や関連の方々の敬称は「氏」で統一する。
- 4 授業以外の時間に先生につこんだ質問をすれば、実は日本での SI の実証研究の先行事例はほとんどないことを聞けたかもしれない。とはいえ、そうした語られざる本音のメッセージを聞きに行く、あるいは付度するような神経は論者には備わっていなかった。
- 5 例外は、SI 研究会を組織している山口健一氏（2016, 2018 など）、なぜか日本語では SI の実証研究の論文は書きたくないんだよねと呟いていた伊藤勇氏（Ito 2011, 2015）、またレイベリング理論を応用した若者の就職活動の研究者、井口直樹氏（2016, 2019 など）らである。ただし、多数の SI 関連の業績を公刊しながら、著作ではなぜ SI 論者と名のらないのだろうか、論者が疑問に感じている研究者は数多い。
- 6 言説分析により社会的常識とされるものの実態や成立を明らかにしようとする場合も、解釈の文脈となる研究者側の常識を持ちこんではならず、そうした常識そのものが相互作用場面で生成変容していく過程の直接観察にも向かわない。
- 7 ミススペルその他、一部の表記を修正した。
- 8 原論文執筆当時の論者による補足。
- 9 中略部分の内容の一部を本論執筆時に補足。
- 10 現在の仏教寺院の関係者は江戸期の寺請け制度による行政機関の末端としての位置づけから、明治期以降の廃仏毀釈と世界的な世俗化、脱宗教化の波にさらされる立場に移行した。京都の観光寺院は自身の敷地内に保管してきた文化財を売却してしまうのではなく、独自の理論から布教と観光の資源と考えて財源を捻出し、文化財保存と、自分たちなりの仏教教理の広報に携わっている。しかし、現在、キリスト教徒となっている論者自身の立場から見なおすと、戦国時代に大名同様の政治的、闘争的アクターとして活動した人々を含め、寺社勢力が江戸期に寺請制度によって行政の末端に囲いこまれていった歴史は、キリスト教会の歴史に顕著に見られる教区制による人々の風俗や道徳の管理体制に、幕府の為政者たちが学んだものではないかとも思える。そして各地の寺が行政機関となり、住民が居住地の寺院に先祖の供養を委ねた時点で、

信仰が自動化、強制化し、ヨーロッパのキリスト教会同様の宗教的退廃もすでに兆していたのではないだろうか。

- 11 とはいえ、交渉概念を活用した古典的な業績として Maines et al. (1983)、ストラウスの著書の出版直後の批判的な言及として印象に残る Farberman et al. (1979) の特に Couch 担当部分 (pp.159-163) も参照。ストラウスの原著でも実例が挙げられているように、同様な交渉が頻繁に繰り返される品物やサービスの販売現場、福祉サービスを提供する行政窓口の分析には、いかにも適しているだろう。またジェンダー、スポーツ、政治など多岐にわたる応用事例も存在する。
- 12 論者は本研究を仕上げる報告書作成の完成を見ずに、次のケースのきっかけとなったフィールドワークに出かけ、京都での仏教会関連の調査からは離れたが、指導者の田中氏はその後も寺院団体の社会学面での顧問として、関連する諸論点にコミットする研究をつづけた (洗・田中 2008; 田中・寺田 2021)。
- 13 エスノグラフィ作成の際、Lofland (1995) が *Journal of Contemporary Ethnography* 誌の編集委員としての選定基準とした「分析的エスノグラフィ」という特性を失わないよう心がけた。それは論者にとって、人類学、民俗学のフィールドワークの一部のように、珍しい儀礼や日常作法の羅列的な記述に陥ることなく、何らかの理論枠組みによる分析や考察を通してデータの解釈を試みたものといった意味になる。社会学の分析対象の多くは、わたしや隣人たちの何でもない日常に過ぎないのだから。
- 14 論者はディレクターズ・カンパニーというホンペンを手がける会社にもぐりこんだため、低予算のテレビドラマでもホンペン・クルーの半分くらいの結構な人数が、各部に分かれて働いていた。
- 15 小人数編成のためこの二つ部署の区別がない。
- 16 ボーリング、配置業にはそれぞれ推進議員連盟があり、福祉入浴や精神科患者のソーシャルクラブは、高齢者福祉や精神保健 (衛生) を推進する議員連盟の活動を紹介するための具体的な福祉業務の現場として、目新しいものをということで上司と相談して選んだ。
- 17 こうした着想はほとんど無意識下のもので、特に公的な企画書などを書いたわけでもないが、公害病の解決を簡単に考えすぎている点自体が、論者自身に巣くう無思慮、偏見の産物である。
- 18 本論執筆中に、論者が参加した会が変質して作業所化したあとの動向の一部を、論者と入れかわるように会に参加した研究者が伝えていると思われる論文を、検索により見いだすことができた (早野 2017)。ここでは、論者の観察時期は前史として略述されている。とはいえ、主要な観察時期も関心のありかも論点の設定自体も異なる点で、複数の研究者のかかわりは貴重である。結局、本稿で記述した患者会の動向自体も、別の研究者が見た場合、まったく異なった捉え方をすることも知れない。その意味で、社会調査において調査報告への研究者個人の主観的な視点の刻印は免れえないものだという点は、いくら注意を喚起しても足りない。
- 19 ただし、これは理論的に想定されうるといっばかりで、言葉通りに受けとめてはならない。フィールドワークの現場で、各個人の自己の微妙な様相、境地を示す me や I について考察、言及することは困難である。実際には人々の社会的行動、発言の観察により、多種多様な社会心理学的考察がなされるという表現に読みかえていかねばならない。

## 参考文献

- Althusser, Louis, [1965] 2005. "Contradiction et surdétermination (Notes pour une recherche)," *Pour Marx*, Paris: La Découverte, 85-128. (= 1994, 河野健二・田村俣・西川長夫訳, 「矛盾と重層的決定」『マルクスのために』平凡社, 149-225.)
- 洗健・田中滋編 (京都仏教会監修), 2008, 『国家と宗教——宗教から見る近現代日本』上, 下, 法蔵館。
- Becker, Howard S., [1963] 1973, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, 2nd ed., New York Free Press. (= [1978] 1993, 村上直之訳『アウトサイダーズ——ラベリング理論とはなにか——新装版』新泉社。ただし底本は 1963 年初版)
- [1982] 2008, *Art Worlds*, 25th Anniversary ed., Berkeley: University of California Press. (=2016, 後藤将之訳, 『アート・ワールド』慶應義塾大学出版会.)

- Blumer, Herbert, [1969] 1986, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Berkeley: University of California Press. (=1991, 後藤将之, 『シンボリック相互作用論』勁草書房.)
- Denzin, Norman K., 1989, *Interpretive Interactionism*, Newbury Park, CA: Sage. (=1992, 片桐雅隆他訳, 『エビファニーの社会学——解釈的相互作用論の核心』マクロウヒル.)
- Dewey, John, [1926] 1929, *Experience and Nature*, London: George Allen & Unwin. (= 2017, 河村望訳, 『デューイ = ミード著作集 4 経験と自然』人間の科学新社.)
- Farberman, Harvey A., Carl Couch and Preston Driggers, 1979, "A Review Symposium: Anselm L. Strauss-*Negotiations: Varieties, Contexts, Processes, and Social Order*. San Francisco: Jossey-Bass, 1978," *Symbolic Interaction*, 2 (2) :153-168.
- Ferguson, Adam (ed., Louis Schneider), [1767] 1980, *An Essay on the History of Civil Society*, New Brunswick, New Jersey: Transaction. (=1956, 大道安次郎訳, 『市民社会史』上・下, 河出書房.)
- 船津衛, 1976, 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣.
- 早野禎二, 2017, 「精神障害者セルフヘルプグループにおける当事者主体の運営の意義と課題——組織論的観点から」『東海学園大学紀要』22: 32-54.
- 宝月誠, 1982, 「婦人一時保護施設入所者の経歴分析——調査の概要」『ソシオロジ』27:1-8.  
——— 2021, 『シカゴ学派社会学の可能性——社会的世界論の視点と方法』東信堂.
- 井口尚樹, 2016, 「就職活動生のアイデンティティ維持とその困難——ブラックボックス化されたレイベリング」『ソシオロギス』40:1-16.  
——— 2019, 「否定的評価と自己認識——アメリカ社会学における研究と課題」『社会学史研究』41:23-39.
- Ito, Isamu, 2011, "Globalizing the Rural: The Use of Qualitative Research for New Rural Problems in the Age of Globalism," Norman K. Denzin and Michael D. Giardina, eds., *Qualitative Inquiry and Global Crises*, Walnut Creek, California: Left Coast Press.  
——— 2015, "Words and Experiences that Reaffirm the Values of Farming and Rural Life: Findings from Qualitative Interview Research in Fukui Prefecture, Japan," 『日本海地域の自然と環境——福井大学地域環境研究教育センター研究紀要』22:91-99.
- 鎌田大資, 1989, 「H・S・ベッカーの「芸術世界」論——職業社会学からのアプローチ」(京都大学 文学部 文学研究科修士論文)  
——— 1990, 「H・S・ベッカーの芸術世界論——前衛はいかに約定へとすり変わるか」『ソシオロジ』35 (2) :79-95.  
——— 1991, 「京都税紛争における京都仏教会のリーダーシップと理論化——ストラウスの交渉文脈概念からの整理」田中滋編『京都税問題研究——政治と宗教のプロブレマティーク』(科研報告書), 33-55  
——— 1994, 「精神障害者の『社会復帰』——個人誌解釈の意義とワーカーの使命」『京都社会学年報』1:97-113. (京都大学)  
——— 1995, 「否定的感情性について——N・K・デンジンによる人間の弱さの社会学的理解をめざして」『ソシオロジ』40 (1) :127-142.  
——— 1997, 「自己欺瞞について——他者の感情性の誤解, その理論モデル, 厚い記述, 解釈」『椋山女学園大学研究論集』28 (社会科学篇) :103-113.  
——— 1998, 「自己欺瞞とダブル・バインド——論理階型論による概念の整理と事例解釈」『椋山女学園大学研究論集』29 (社会科学篇) :51-63.  
——— 1998a, 「DOING SOCIOLOGY——調査過程でのアブダクションとエビファニー」『ソシオロジ』42 (3) :143-148.  
——— 1999, 「精神保健福祉サービスを受ける人たちの『沈黙の気づまり』——ある座談会の封印をめぐる」『椋山女学園大学研究論集』30 (社会科学篇) :233-247.  
——— 2000, 「こころの病と弁明する人生——経験の再解釈に見られる創造性について」『椋山女学園大学研究論集』31 (社会科学篇) :21-38.

- 2001, 「ある問題患者の生活と意見——にせの感情理解について」『椋山女学園大学研究論集』32 (社会科学篇) :175-202.
- 2002, 「理由なき反発——精神障害者患者会活動における感情的葛藤と状況の定義」(前, 後編)『椋山女学園大学研究論集』33 (社会科学篇) :189-210; 『人間関係学研究』1:241-65. (椋山女学園大学)
- 2020, 「ある精神障がい者患者会に関する調査行為の終結に向けて——序論としての補遺」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 51:143-158.
- 2020a, 「「ポップ文人」岩田信市の演劇への社会学的接近——コミック・オペラ上演史と演目選定戦略から」『人間関係学研究』16:1-22. (椋山女学園大学)
- Kleinman, Sherryl and Martha A. Copp, 1993, *Emotions and Fieldwork*, Thousand Oaks, Ca.: Sage. (=2006, 鎌田大資・寺岡伸悟訳, 『感情とフィールドワーク』世界思想社)
- 黒ダライ兄, 2010, 『肉体のアナーキズム——1960年代・日本美術におけるパフォーマンスの地下水脈』グラムブックス.
- Lofland, John, 1995, "Analytic Ethnography: Features, Failings, and Futures," *Journal of Contemporary Ethnography*, 24: 30-67.
- Maines, David R., Noreen M. Sugrue and Michael A. Katovich, 1983, "The Sociological Import of G. H. Mead's Theory of the Past," *American Sociological Review*, 48: 161-173.
- Mead, George Herbert (ed., intro., Charles W. Morris, Daniel R. Huebner and Hans Joas), [1934] 2015, *Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist: Definitive Edition*, Chicago: University of Chicago Press. (=2018, 植木豊編訳, 『G・H・ミード著作集成』作品社, 197-602)
- Meilhac, Henri et Ludovic Halévy, n.d. [1900-1902], "Barbe-Bleue," *Théâtre de Meilhac et Halévy de l'Académie Française*, III, Paris: Carmann Lévy, 222-289. (=2018-2019, 鎌田大資訳, 「2006年度大須オペラ, メイヤック&アレヴィ作「青ひげ」台本翻訳(上, 下)——名古屋における演劇社会学の試み資料編」『金城学院大学論集(社会科学編)』, 15(1) :135-164, (2) :12-39.)
- , ——— n.d. [1900-1902]a, "La grande-duchesse de Gérolstein," *Théâtre de Meilhac et Halévy de l'Académie française*, II, Paris: Carmann Lévy, 179-305. (=2021, 鎌田大資訳, 「2001年度大須オペラ, メイヤック&アレヴィ作「ブン大将」台本翻訳(上, 下)——名古屋における演劇社会学の試み資料編」『金城学院大学論集(社会科学編)』, 17(2) :4-30, 18(1) :86-116.
- 西秋良宏, 2020, 『アフリカからアジアへ——現生人類(ホモ・サピエンス)はどう拡散したか』朝日新聞出版.
- Pollner, Melvin, 1987, *Mundane Reason: Reality in Everyday and Sociological Discourse*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 『Rear』, 2018, 41, (特集: 大きな岩田信市) リア制作室.
- Selznick, Phillip, 1957, *Leadership in Administration: A Sociological Interpretation*, Evanston, IL: Row Peterson. (=1963) 1985, 北野利信訳, 『組織とリーダーシップ』ダイヤモンド社.)
- Shibutani, Tamotsu, 1955, "Reference Groups as Perspective," *American Journal of Sociology*, 60:562-569.
- 1962, "Reference Groups and Social Processes," A. Rose, ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston: Houghton Mifflin, 128-147.
- Strauss, Anselm L., 1978, "A Social World Perspective," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119-128.
- 1978a, *Negotiations: Varieties, Contexts, Processes, and Social Order*, San Francisco: Jossey-Bass.
- 1982, "Social Worlds and Legitimation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.4, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 171-190.
- 1984, "Social Worlds and Their Segmentation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.5, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 123-139.
- 田中滋・寺田憲弘編, 2021, 『聖地・熊野と世界遺産——宗教・観光・国土開発の社会学』晃洋書房.
- Thomas, William I. and Dorothy Swaine Thomas, 1928, *The Child in America: Behavior Problems and Programs*,



日本人社会学者でも symbolic interactionist ethnography を手がけられるか

New York: Alfred A. Knopf.

山口健一, 2016, 「在日朝鮮人の個人主義的な民衆文化運動と共生実践」『ソシオロジ』 60: 21-39.

——— 2018, 「在日朝鮮人の民族まつりにおける多文化共生実践」『社会学評論』 69:37-55.